

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次のa～dの各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 活躍して殊勲を立てる。(1) しゅくん 2 ちょうし 3 こうせき 4 しゅくほう)
b 昆虫が脱皮する。(1) だつしゅつ 2 せいちょう 3 だつぴ 4 うか)
c 道路が渋滞する。(1) かいつう 2 こんざつ 3 じゅうたい 4 かんせい)
d 先輩として後輩を導く。(1) みが 2 みちび 3 さば 4 まね)

(イ) 次のa～dの各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 公園ではシキ折々の花が楽しめる。
1 フウキが乱れないように注意する。 2 練習の成果をハッキする。
3 キセンが港から煙を出して出航する。 4 俳句にはキゴが必要だ。
b 制度の見直しはカキユウを要する課題だ。
1 山奥のキユウリユウで釣りを楽しむ。 2 キユウシに一生を得る。
3 損壊していた道路がフツキユウする。 4 朝からバスがウンキユウする。
c 産業が発達してケイザイが着実に成長する。
1 街のボウサイに必要な設備をつくる。 2 神社でサイレイの準備が進む。
3 難民をキユウサイする組織ができる。 4 絵画のサイノウに恵まれる。
d 参加者が優勝をアラソウ。
1 決められた場所でエンソウする。 2 電力の消費を抑えるソウチを開発する。
3 授業の途中でソウタイする。 4 会議で白熱したロンソウが続く。

(ウ) 次の各文のうち、敬語の使い方が適切でないものを一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 お客様より依頼を承りました。
2 先生から先に申してください。
3 資料はこの場で拝見します。
4 友人と一緒に伺う予定です。

(エ) 次の文章中の□に入れることわざとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

アフリカのある国の言葉の一つを勉強していた友人が、長年の夢をかなえて、ついにその国に留学した。留学先の授業では、その国の言葉を用いて文章を書いたり、発表をしたりして、勉強に力を入れていくそうだ。まさに□だと思った。

- 1 水を得た魚のよう 2 逃した魚は大きい
3 魚心あれば水心 4 水清ければ魚すまず

- (オ) 次の例文中の——線をつけた「から」と同じ意味で用いられている「から」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 鉄鉱石から鉄を取り出す。

- 1 旅行中の親戚から絵はがきが届く。
- 2 朝食のあとからずっと何も食べていない。
- 3 気温が下がったからセーターを着る。
- 4 実習で木綿から糸をつむぐ。

- (カ) 次の短歌を説明したものととして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

駒田 晶子

- 1 列車が自分の前を一瞬で通り過ぎたあとに並んで何本も咲く立葵を揺らして遠ざかり、離れていく列車に視点を移して自分を眺める様子を「点景となりゆくか」と表現し、読点を用いて描いている。
- 2 自分に乗せた列車の窓の外に立葵が並んでいることを「一斉に」と表現し、列車が通り過ぎる風にも負けずにどの花もなびかないでいる立葵に視点を移し、自分が遠ざかっていく様子を描いている。
- 3 列車の窓から立葵の花が並んで揺れるところを見ていううちに、進みつつある列車にいながらも立葵に視点を移して自分を見つめていたということを、「わたしは」を最後に置くことで描いている。
- 4 列車から外を眺める様子を「車窓には」と表現し、列車が通ったときに一本だけ生えている立葵の花が一つ揺れて落ちるのが見え、遠ざかる立葵に視点を移すことで空間が広がる様子を描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学校三年生の「吉岡螢子」は、二年生のときに東京から転校してきたが、その際、同級生と親密な関係にならないようにすると決め、教室では虫についての本を読むばかりだった。「母」は、「螢子」が虫を好むために周囲の人とうまくいかないのだと考えていたが、「螢子」は、同級生の「鈴木真優」、「長谷部健都」、「小野航平」、「遠藤咲」の四人とともに、ホタルを守る環境保護のボランティアに参加した。ホタルを見に行くというボランティアの行事は中止になったものの、五人は連絡を取り合って自分たちで企画し、「螢子」以外の四人はホタルを見に行くことを決めた。そこで、「螢子」は「母」に反対されると思いつつも、四人と一緒にホタルを見に行くために「母」と話をすることにした。



(注) ニックル「蛭子」たちのクラスの授業を担当するALT。

(いがらしらし) (五十風) 美_み怜_{さと}「15歳の昆虫図鑑」から。一部表記を改めたところがある。)

(ア) 線1「でも、これがわたしだわかってわかって欲しい……。」とあるが、そのときの「螢子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 四人がそれぞれの課題を乗り越えようとして成長したことを思い、話しながら「母」へ一度も目を向けられなかったが、出かけることを「母」に認めてもらうために胸の内を話そうとしている。

2 「母」に反対されたことで一度は引き下がったものの、四人が自分なりの方法でそれぞれの課題と向き合って成長していることを思い出して考えを改め、勇気を持って自分の気持ちを伝えていく。

3 「母」の考えに反論したいと思っながら「母」に対して何も話し出せないままだったところ、四人がそれぞれの課題を克服しようとして成長している姿を思い出し、自分の考えを話そうとしている。

4 四人がそれぞれの課題と向き合ったことで成長している姿を思い出し、「母」の意に沿わないことだとわかっているものの、諦めがちな今までの自分とは違って勇気を出して自分のことを伝えていく。

(イ) 線2「母は傷ついたように顔をしかめる。」とあるが、そのときの「母」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 以前のことを娘に思い出させて反省を促した上で、虫を好むことは大人びた趣味であるので中学生にふさわしくないと批判したが娘の様子は変わらず、悲しんでいる。

2 将来のことを含めて心配する内容を娘に伝えた上で、虫を好むことで交友関係に悪影響が出ていると指摘したが、娘の考えが変わらないままであることに困惑している。

3 将来のことを心配していると娘に伝え、虫を好むことが学校生活に悪影響を与えているという指摘に対しても娘が沈黙を貫いたため、娘の気持ちがわからず悩んでいる。

4 以前にあったことを娘に思い出させて、将来のことはともかくとしても今の学校でのことが心配だと訴えたが、娘から反省の言葉を得られずに怒りつつ戸惑っている。

(ウ) 線3「なぜだか鼻の奥が熱くなった。」とあるが、そのときの「螢子」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「母」と理解し合えたかもしれないと感じていたときに、友達が来たという声を耳にして四人がやって来ることを想像していたところ、思っていたとおりでだったので、うれしさのために涙ぐんでいる。

2 「母」と理解し合えるのかわからず悲しくなっていたとき、自分を呼ぶ四人の声がはつきり聞こえたので確認したところ、本当に四人が家まで来ていたことがわかり、感動して涙が込み上げている。

3 「母」と理解し合う難しさを感じたときに、友達が出来たという言葉を耳にして四人のことが頭に浮かんだところ、実際に四人が家に来ていて、涙の理由を自覚できないままに泣きそうになっている。

4 「母」と理解し合うことを諦めそうになったとき、自分を呼ぶ声を聞いて誰が出来たのか想像できずに不安になったところに、考えもしなかった四人が家に来ていたので、涙が出そうになっている。

(エ) 線4「聞きたいことはたくさんあるのに声が出ない。」とあるが、そのときの「螢子」を説明した次の文章中の I・II に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

自分の家の住所を知らないはずの同級生四人が、家を探し当ててわざわざやって来たことで、

I。そのときに、四人のうちの一人である「鈴木さん」が、自分のことを友達だと言ってくれたことに対し、聞きたいことがいくつもあるものの II 泣きそうになったために、言葉を出せないでいる。

- 1 I うれしい気持ちだけで心の中が満たされた
- II なにを言えばいいのかわからず
- 2 I 胸の奥底に隠されていた気持ちがはつきりした
- II 聞きたい気持ちがしぼんで
- 3 I 家の場所のことを何も話していなかったと気づいた
- II 友達とは誰を指すのかわからず
- 4 I 二つの気持ちが混ざって整理できなくなった
- II 思いがあふれ出てきて

(オ) 線5 「母はぎゅっと唇を結んで、少しうつむく。」とあるが、そのときの「母」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「安達さん」から自己紹介の後に娘を引率したいという申し出があったので、心を決めてはつきりと断ったが、娘のために見守ってみるようすすめられて、どうするか考えている。
- 2 「安達さん」から引率についての申し出があつて困っていると、子どものやりたいことを見守るよう提案された上に娘たちの可能性を示唆され、感じるがあつて決められずにいる。
- 3 「安達さん」から一緒に来てもらいたいと頼まれたけれども、突然のことであつたので決められずに困っていると、娘たちの将来のことが話題になつて気になり、判断がつかないでいる。
- 4 「安達さん」から挨拶があつた後に一人で責任をもつて娘たちを引率するという提案があり、行かせたくないと思つていたところに、娘の将来の可能性が広がると指摘されて迷つていいる。

(カ) 線6 「すみません、よろしくお願いします。」とあるが、ここでの「母」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 娘のこを受け入れてくれる人たちがいたという事実によつて、娘のことで自分にも気づいていなかったことがあると思つて、ホタルを見に行かせることを決心したように読む。
- 2 自分がどれほど思つているか娘が考えないことにいらだちつつも、娘のことを理解して仲良くしている人たちがいるとわかつて、ホタルを見に行かせてもよいと思ひ直したように読む。
- 3 虫に対する考え方が娘と一致したと確信したことに加え、自分以外に娘のことを気にかける人たちが現れたことで考えが変わり、ホタルを見に行かせてもよいと思ひ始めたように読む。
- 4 娘の虫に対する思いを改めて確認し、娘を大事に思つてくれる人たちが前の学校のとき以来ずっと変わらずにいるとわかつて、ホタルを見に行かせようと決めたように読む。

(キ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分を変えたいと思う「蛍子」が、気にかけてくれる人たちに勇気づけられて「母」に本心を伝え、家族と話し合おうと決めつつ自分らしさを大事にしよつとすることを、会話を中心に描いている。
- 2 自分の気持ちを言えなかった「蛍子」が、自分を理解してくれる人たちが来る前に「母」を説得して家族ともわかりあえると気づき、誰とでも本音で話せるようになる様子を、心情を交えて描いている。
- 3 自分をすることを「母」にわかつてもらおうとした「蛍子」が、自分を気づかせてくれる人たちと協力し、「母」に自分を完全に理解してもらえたと感じて安心する様子を、短い文を重ねて描いている。
- 4 自分の現状に悩む「蛍子」が、自分を助けようとしてくれる人たちの力を借り、心配する「母」を気づかつて「母」の思うような姿に自分を変えたいと感じる様子を、話し言葉を用いて描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注) 不文律¹¹はつきりと示されないながらも互いに了解し合っているさま。

(前田^{まえだ} 安正^{やすまさ}「AIに書けない文章を書く」から。一部表記を改めたところがある。)

移動平均線＝株価などの傾向を知るために、決まった期間の平均を日ごとに算出して結んだ線。
バイアス＝先入観や偏見。

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-----|-------|---|-----|-----|------|---|-------|
| 1 A | このように | B | つまり | 2 A | では | B | したがって |
| 3 A | むしろ | B | しかし | 4 A | すなわち | B | あたかも |

(イ) 線1「文章は自分自身の『時』を記すことでもあるのです。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 文章にはその時々¹の出来事²がにじみ、自分の考えは他者から受けた影響によって形づくられるので、文章を書くとき自分というより他者の存在が表れるということ。
- 2 文章にはその時々¹の出来事²が書かれ、自分の存在は時間の中で変わり続けるので、文章には自分という存在ではなくその時々¹にあったことが表れるということ。

3 文章には自分の考えが書かれ、その時々¹にあったことと無関係に自分という存在は形づくられるので、文章にはその時々¹の考えが中心となって表れるということ。

4 文章には自分という存在がにじみ、自分の存在は積み重なる時間とともに形づくられるので、文章を書くときその時々¹の自分自身のことが自然と表れるということ。

(ウ) 線2「記事や文章を書くときに、完全に中立でいられるようには思えません。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 客観や中立¹ということを考えて文章を書くときに、自分に降り掛かった事実を客観的に表現することはできるが、文章には書き手個人の考えが残り、中立を完全には担保できないから。

2 客観や中立¹を意識して文章を書くとしても、文章には書き手個人の考えが少なからず残る上に、事実を客観的に表現することは難しく、完全な客観と中立を求めること自体に無理があるから。

3 客観や中立¹を重んじて文章を書くときには、他者の意見を並べて載せることで中立を担保することは可能だが、事実を正確に記すことが難しく、完全な客観や中立を求められないから。

4 客観や中立¹を気にして文章を書くとしても、書き手の考えを文章から消せるとは限らない上に、自分の身に降り掛かった事実しか客観的に書けず、客観や中立を完全には求められないから。

(エ) 線3「それを客観的に見て、長期的な判断をすることが、『時』を記す意義です。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 その時々¹の自分の気持ちを含めずにあつたことのみを書き続けることで、時間が経過してもその時々¹の出来事²の大切な部分を保存することになり、後から見て客観的な記録になるということ。

2 その時々¹に感じたことを記しておくことで、時間が経過してもその時々¹の感情が残ることになって、自分自身の気持ちをいつまでもそのまま変化させずにいられるようになるということ。

3 その時々¹の気持ちを記しておくことで、余分なものが削ぎ落とされて芯が現れ、書いたときの気持ちだけにとらわれずに、自分自身の経年による変化を読み取ることができるということ。

4 その時々¹の気持ちを文章にすることで、気持ちが整理される上に時間が経過するに従って強い感情ですら和らぎ、芯となるものが消えさるために、物事を考え直せるようになるということ。

(オ) 線4「文章を書くということは、『思考の軌跡』を記すことだ」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 その時々にあった課題を解決しようと考え続けていたことが、文章を書くときに自分という存在として文章の中に反映されることになるから。

2 その時々にあった課題に対して考えずに答えを得られたことが、文章を書くときに自分自身のこととして自然と文章に表れることになるから。

3 その時々にあった課題のうちで答えを求めずにいたことが、文章を書くときになって自分自身のこととして自然と書き表れることになるから。

4 その時々にあった課題を解決するために考えていたことは、文章を書くときに反映されることがなくとも記憶にはとどめられることになるから。

(カ) 線5「そのストーリーは、『自分にしか書けない』唯一のものなのです。」とあるが、それを説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自分自身で作った思考や積み重ねた感情というものを誰もが持っているが、読み手に影響を与えられるのは、文書として残されている思考や感情をとまわらない文字列だということ。

2 自分自身だけで作り上げた思考や積み重ねてきた感情というものを誰もが持っており、読み手に影響を与えることはないが、大事な経験や称賛される実績として心に残っていくということ。

3 自分自身だけの考えや感情の移り変わりというものを誰もが人生の中で持っているが、文章に書き表そうとしても読み手を変化させることのできない、単なる文字列になるということ。

4 自分自身が考え続けてきたことや積み重ねてきた思いというものを誰もが持っており、読み手を変化させることのできる、思考や感情をとまわった情報として文章に表れ出すということ。

(キ) 本文について説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 文章には書いた人間の存在がにじむので、振り返られるようその時々々の気持ちを書くことを勧めた上で、人間の書く文章には他者を動かす力があるということについて、時間に関係させ論じている。

2 文章には書き手の個性がにじみ出るといふ怖さがあり、気持ちのゆらぎを書かないよう勧めた上で、文章は読み手の共感を呼び起こす力を持つということを、記者としての考えをもとに論じている。

3 人間が文章を書くということは、自分の存在意義を明らかにすることだと述べつつ、他者を動かす文章を書くためには人間が介入する必要があるということ、筆者の実体験を交えて論じている。

4 人間が書く文章は、出来事の記録にはなるが時代の変化を読み取る材料にはならないと述べつつ、書き手の人生が文章ににじむために読み手を動かせるということ、報道に関連させて論じている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「劉伯芻」の家の前を、薪となる柴をかついで通る「男」がいた。あるとき、「劉伯芻」は「男」に声をかけた。

「さても汝は、毎日柴をになひ、この門前を通り、帰る時は歌うたひ、思ふことなく見ゆるこそうらやましけれ。我君に仕へて官にあづかり、衣食心のままに、召し使ふ人あまたあれども、心は常につながれたるがごとく、内外につけて夜昼やすきいとまなし。汝はいかにして住みけるものぞや。心のうち、楽しみありてものにかかはらずと見えたりと、うらやみ思ふ。」と申されしかば、この者、答へて言ふやう、「それがしは、この惣門の傍らに庵を結び、ただ一人住みて、二百文の銭をもつて柴を求め、毎日市に出

(内でも外でも)

(多く)

でてしろなし、利潤少し、まうけて餅を買ひ、酒飲みて、庵に帰り、膝をかがめていただき、肘を曲げて枕

(注) (小屋)

ウ

(注)

(によつて)

(売り払い)

として夜を明かす。家も衣食も望みなく、科を犯さねばおそれもなく、蓄へたることなければ心にかかる憂へもなし。一盃の酒を友として楽しみをきはむるなり。」と答へしかば、劉伯芻いよいようらやみ、「賢人とは汝のことぞかし。いま少し利潤多くば、ますます楽しみに限りなからんに。」とて、また、銭一貫文を与へらる。

(答えたので)

2

男喜び、取りて帰り、その朝よりは柴多くになひて出でつつ、帰るときには、足元忙はしく、歌もうたはず。かくて四、五日の後にかの一貫文の銭を持ち来り、投げ返していはく、「あたら、一生涯の楽しみ

(注)

をこの銭にて失ふなり。庵の内に隠し置けば、盗人これを知りて密かに来りて取り、失せなかと、いく

ばく心の忙はしく出入に気づかひあり。あらぬもの故に我が憂へに沈むことよ。」とて、出でて帰りぬ。

(こっそりと置いているので)

(せつかくの) 3

(なくなるのではないかと)

ばく心の忙はしく出入に気づかひあり。あらぬもの故に我が憂へに沈むことよ。」とて、出でて帰りぬ。

(慌ただしくして)

(以前とは違うこと)

エ

「堪忍記」から。

(注) 惣門 城や屋敷の外囲いにあつた大きな正門。

文 貨幣の単位。

一貫文 約千文。

(ア) 線ア〜エの中から、他と主語が異なっているものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ア

2 イ

3 ウ

4 エ

(イ) 線1 「うらやみ思ふ。」とあるが、そのように言ったときの「劉伯芻」を説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 夜に安らいでも昼が忙しい自分と違って、「男」がいつでも楽しそうなために興味をもってしている。
2 安らぐ暇のない自分と違い、「男」が何にもとらわれずに楽しんでいるように見え心引かれている。
3 家に閉じこもっている自分と違い、「男」が外に出て楽しそうに仕事をしているため憧れている。
4 仕事をせずに暮らしている自分と違い、「男」が働くことを楽しんでいることに関心を抱いている。

(ウ) 線2 「劉伯芻いよいようらやみ」とあるが、そのときの「劉伯芻」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 市場で柴を売って得た僅かな利益で「男」が生活しているだけでなく、生活に今以上の望みを抱かず、心におそれや心配がなく楽しそうに暮らしていることを、ますますうらやましく思っている。
2 市場で柴をただでもらって売りさばくことで「男」が暮らし、今の生活に対して余計な望みをもっていない上におそれや心配がなく、暮らしを楽しんでいることを、いっそううらやましく思っている。
3 市場で柴を売って得た僅かな利益で「男」が生活していることに加え、不安に思うことがなく仕事に励んで立派な家に移り住もうとし、楽しそうに生きていることを、更にうらやましく思っている。
4 市場に行って柴を売り切って得た利益で「男」が暮らし、生活の中に金を一切使うことのない楽しみをもっていて、不安に思うことがないということを、これまで以上にうらやましく思っている。

(エ) 線3 「一生涯の楽しみをこの銭にて失ふなり。」とあるが、「男」がそのように言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 金をもらったことで暮らしにゆとりが生まれ、いつも落ち着いて生活できるようになったが、仕事の張り合いを失ったことで楽しみがなくなったから。
2 盗まれないように金を人に預けたことで、金を使われないか心配になって柴をはやく売りさばく必要ができ、以前と同じ働き方ができなくなったから。
3 柴をかつぐ量が増え、小屋の中に金を置いている状況にあって、今までにはなかった悩みに気持ちごとらわれて心に余裕のある生活を失ってしまったから。
4 金が増えたため柴をかつぐ量が少なくなって体の疲れは減ったが、今までにはなかった心配事が増えて、以前のような心の余裕がなくなってしまったから。

(オ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「劉伯芻」は「男」が楽しそうにしていることに感心し、「男」の楽しみをもっと追求させたいと考
え金を贈ろうとしたが、生き方が変わることを嫌がった「男」は金をもらわずその場で突き返した。
2 「劉伯芻」は「男」のため込んでいる金が多いことに感心し、「男」に金を贈って今以上にもうけさ
せてみようと思ったが、自分の仕事が増えることを嫌がった「男」によって金を突き返された。
3 「劉伯芻」は「男」が仕事ばかりを楽しんで生活していることに感心し、「男」に金を贈って他の楽
しみを味わわせようと思ったが、自分の楽しみを失うと感じた「男」は金を受け取らなかった。
4 「劉伯芻」は「男」の生き方に感心し、「男」にもっと楽しませようと思いと考えて金を贈つ
たところ、大事にしていた生活を結果的に変えるはめになった「男」によって金を投げ返された。

(問題は、これで終わりです。)

